

三和教田遺跡 G地点

2000年

日田市教育委員会

例 言

1. 本書は、有限会社天領住宅の宅地造成に伴い、日田市教育委員会が委託を受けて平成11年度に発掘調査を実施した三和教田遺跡G地点の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査での遺構写真および遺構実測は行時・吉田が行い、遺物実測および製図作業は吉田が行った。
3. 遺物写真は文化財写真家長谷川正美氏に撮影いただいた。
4. 出土遺物や図面類はすべて日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
5. 調査にあたっては、有限会社天領住宅代表取締役宮崎高秀氏や土地所有者の用松清幸氏、地元の方々のご協力を得た。また、駐車場を株式会社キデンリース日田営業所のご好意により、確保することができました。記して感謝申し上げます。
6. 本書の執筆、編集は吉田が行った。

本文目次

I 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 調査の内容	2
IV まとめ	7

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図 調査地点周辺の地形図 (1/5,000)	3
第3図 遺構配置図 (1/300)	4
第4図 土層断面実測図 (1/100)	4
第5図 1号溝、1・2号流路実測図 (1/60)	5
第6図 杭列実測図 (1/40)	5
第7図 1号溝、2・4号流路実測図・土層断面実測図 (1/100)	5
第8図 1号溝、2・3号流路実測図・土層断面実測図 (1/100)	6
第9図 出土土器実測図 (1/3)	6
第10図 出土木製品実測図 (1/8)	6

図 版 目 次

図版1	1. 調査区全景写真 (北から)	2. 1号溝、2・4号流路	
	3. 1号溝、2・3号流路	4. 1号溝・1号流路検出状況	
	5. 1号溝・2号流路	6. 杭列検出状況	7・8. 出土土器
	9・10・11. 出土木製品		

I 調査の経過

1. 調査に至る経過

平成11年8月9日付けで有限会社天領住宅より、日田市大字三和字大塚2477番地2における宅地造成に伴う埋蔵文化財所在の有無についての照会文書が日田市教育委員会に提出された。

この開発予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である三和教田遺跡に該当し、遺跡が存在する可能性が高いことから、平成11年10月26日に試掘調査を行った結果、水田遺構や流路が確認されたほか、弥生土器・土師器・陶磁器などが出土した。試掘結果を踏まえ、事業者とその遺構に関する取扱いについて協議をおこなった結果、盛土工法である事業予定地内の部分的な調査を行うこととなった。

平成11年10月14日には有限会社天領住宅より埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成11年12月1日付け教委文第6598号にて大分県教育委員会より発掘調査実施の通知が出された。

発掘調査面積は、事業造成予定面積1,045㎡のうち、300㎡を調査対象とした。調査期間は平成12年1月11日から機械による表土はぎ作業を始め、同年2月10日までに全ての調査を終了した。調査区は、未調査部分を含めて遺跡保護のために真砂土による埋め戻しを行った。

以上、平成11年度に発掘作業・整理作業を実施し、平成12年度に報告書作成を行った。

2. 調査組織

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）

調査事務 原田俊隆（文化課長）・石井英信（文化課課長補佐兼文化財係長）・佐々木豊文（文化課主査）・美野寿美香（文化課臨時職員）～平成12年3月・江田香織（文化課臨時職員）平成12年4月～

調査員 行時志郎・吉田博嗣（文化課主任）

調査作業員 安達義男・安達アサコ・安達ツヤコ・秋吉ミュキ・秋吉利彦・赤尾千恵子・重石芳子・鎌倉章・高野十三六・平川寅記

II 遺跡の立地と環境

三和教田遺跡は、筑後川の支流である花月川中流域右岸の標高約110m前後の低丘陵上に位置している。この遺跡が所在する付近は日田盆地内の北部にあたり、花月川をさらに遡ると中津・宇佐へと通じる。遺跡の最も高い位置から南側を望むと、日田市街地が一望できる好所でもある。

遺跡周辺は現在三和・花月と呼ばれ、この地域一帯には尾坪、大坪、栗ヶ坪といった条里関連地名が多く残ることから、奈良時代の条里地割りの推定がなされている。中世期には遺跡から2km南の花月川左岸にある慈眼山を拠点とした郡司大蔵氏が日田の地を支配していた。中世末期になるとこの大蔵氏から大友氏へと支配体制は変わり、その実権は大蔵氏の一族郎徒8名による郡老に委ねられ、その一人である財津氏がこの地域を拠点としていた。

三和教田遺跡周辺の遺跡には、まず花月川を挟んだ台地上に葛原遺跡が存在する。これまでに4次の調査が実施され縄文時代後期、弥生時代前期から中期、古墳時代後期、中世期の複合した集落跡が確認されている^{註1)}。この遺跡内には、葛原古墳、遺跡南側斜面には縫ヶ迫古墳群などが点在している。

また、三和教田遺跡の北側にあたる山田原台地上には弥生時代中期から後期、奈良時代、中世期の集落や墓地在り^{註2)}が発掘された後迫遺跡がある。この遺跡の周辺には方格規矩鏡片が発見された草場第1遺

跡や用松原、谷ノ久保遺跡などが立地しており、市内では大規模遺跡の一つに数えられる。

さらに、この台地縁辺部には用松中村古墳が^{註3)}、台地斜面には5世紀後半から8世紀の横穴墓が発掘された羽野横穴墓群が存在し^{註3)}、また花月川流域沿いの沖積地には古墳時代前期の竪穴住居跡や土坑などが調査された日田条里遺跡^{註4)}がある。

三和教田遺跡では、今回の調査区（G地点）が7次調査となる。これまでに県・市教委により6度の発掘調査などが実施されているが^{註5)}、A地点では弥生時代の土坑やピット、B地点では旧石器時代のナイフ形石器などが出土しているほか、弥生時代後期の環濠・竪穴住居跡・掘立柱建物跡、古墳時代後期の溝・竪穴住居跡・掘立柱建物跡、また中世期の建物跡が確認されている。このほか、C地点では縄文時代後期～晩期の流路より当該期の縄文土器や土偶、木製品が出土している。また、D地点では旧石器時代のナイフ形石器などが出土したほか、弥生時代中期の竪穴住居跡や土坑などが確認されており^{註8)}、E地点では縄文時代後期～晩期の流路が調査されている^{註9)}。

註1) 昭和61・62年度、平成元・6年度に日田市教育委員会が発掘調査を実施。

註2) 平成3～5年度に大分県教育委員会、平成10・11年度に日田市教育委員会が発掘調査を実施。

註3) 渋谷忠章『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会 1985年

註4) 友岡信彦「日田条里遺跡群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査(6)』大分県教育委員会 1997年

註5) 土居和幸『三和教田遺跡』日田市教育委員会 1999年

註6) 土居和幸「三和教田遺跡B地点」『平成6年度日田市埋蔵文化財年報』1997年

註7) 吉田博嗣『三和教田遺跡C地点』大分県教育委員会 1997年

註8) 土居和幸『三和教田遺跡D地点』日田市教育委員会 2000年

註9) 若杉竜太「三和教田遺跡E地点」『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』1999年

Ⅲ 調査の内容

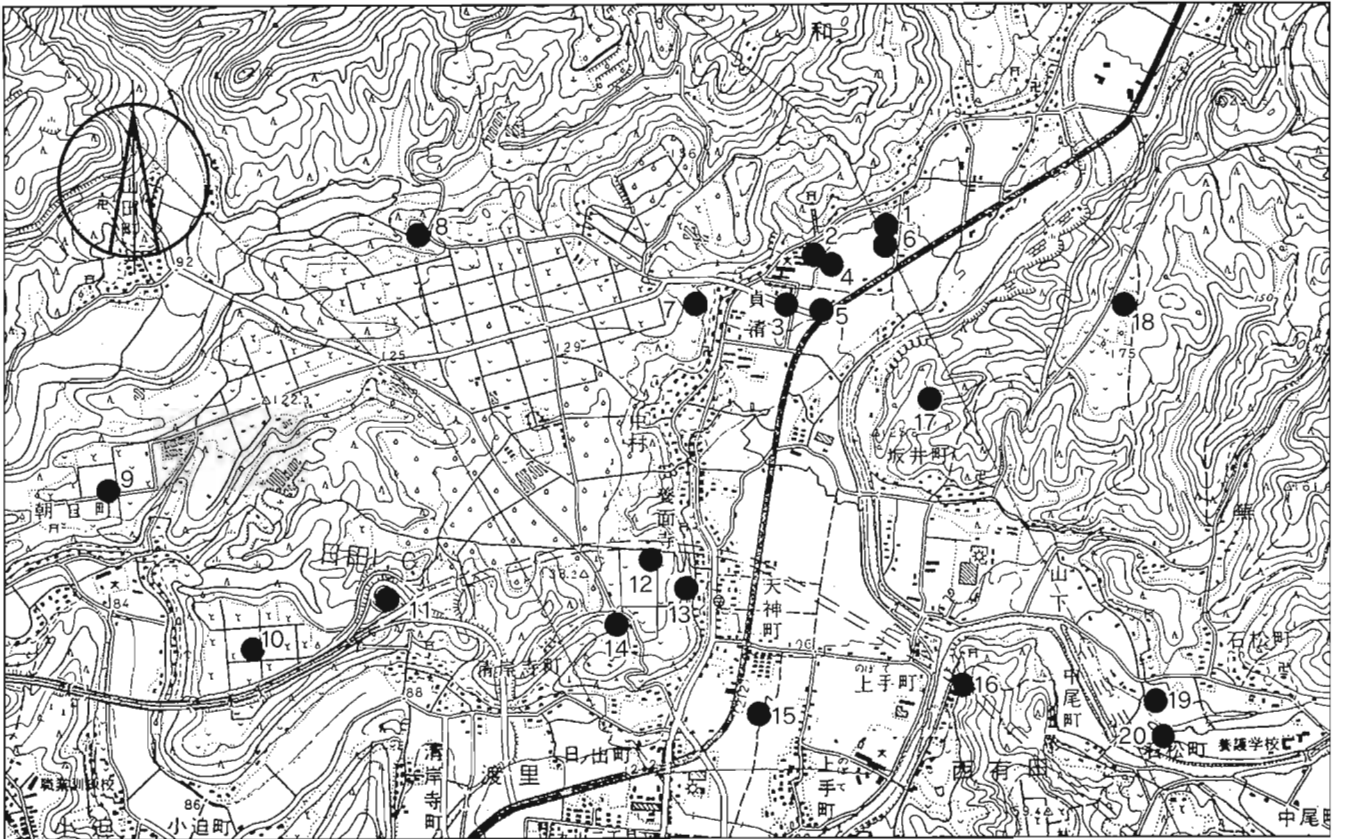
1. 調査の概要

今回の調査区は、平成6年度に発掘調査を行ったA地点の約30m南側に位置している。A地点では弥生時代の土坑などが検出されていることから、同様な時期の遺構の存在が想定された。まず、水田であった調査区の表土を北側から機械により除去したところ、地山面との変化を東西方向に確認することができたが、これは西側から東側に傾斜している自然地形であることがわかった。

その後、北東側にトレンチを入れた結果、南北方向に走る複数の溝や流路を確認することができた。以上のことから、溝や流路の方向性を確かめるために調査区の南北・東西方向に計3本のトレンチを設定した。

結果、溝2条、流路4条、杭列などを検出し調査を行った。遺物については少量の土器と木製品が出土する程度であった。

以下、検出された遺構と遺物について述べることにする。

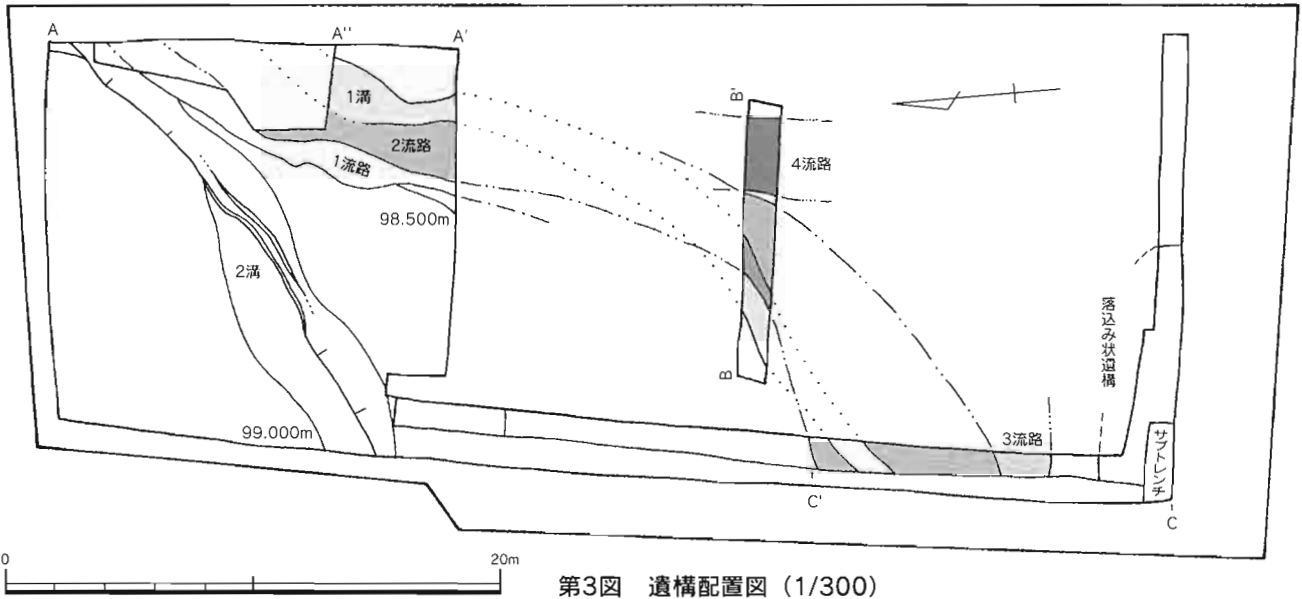


第1図 遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

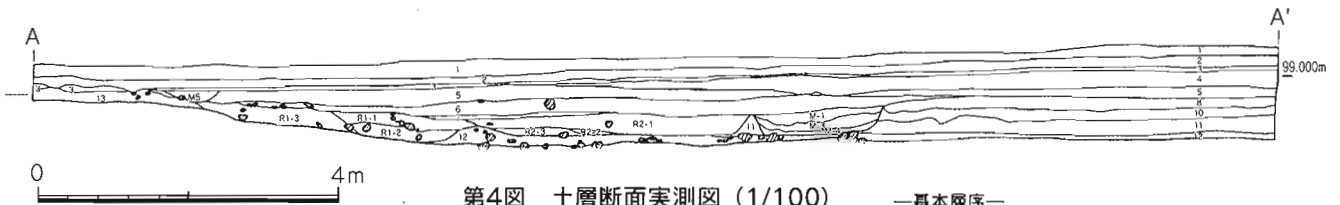
- | | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 三和教田遺跡A地点 | 2. 三和教田遺跡B地点 | 3. 三和教田遺跡C地点 | 4. 三和教田遺跡D地点 | 5. 三和教田遺跡E地点 |
| 6. 三和教田遺跡G地点 | 7. 用松原遺跡 | 8. 谷ノ久保遺跡 | 9. 朝日宮ノ原遺跡 | 10. 小迫辻原遺跡 |
| 11. 草場第一遺跡 | 12. 後迫遺跡 | 13. 羽野横穴墓群 | 14. 草場第二遺跡 | 15. 日田条里遺跡 |
| 16. 夕田横穴墓群 | 17. 縫ヶ迫古墳群 | 18. 葛原遺跡 | 19. 内ノ下遺跡 | 20. 川原田遺跡 |



第2図 調査地点周辺の地形図 (1/5,000)



第3図 遺構配置図 (1/300)



第4図 土層断面実測図 (1/100)

—基本層序—

- | | |
|------------|------------|
| 1層 表土 | 8層 黒灰色粘質土 |
| 2層 淡灰褐色砂質土 | 9層 茶灰褐色粘質土 |
| 3層 黄灰褐色砂質土 | 10層 暗灰色粘質土 |
| 4層 灰褐色粘質土 | 11層 青灰色粘質土 |
| 5層 暗青灰色粘質土 | 12層 暗茶色砂質土 |
| 6層 暗灰褐色粘質土 | 13層 砂レキ層 |
| 7層 暗灰色砂質土 | |

- | | |
|--------------|----------------|
| 1号溝 | 1号流路 |
| M1層 暗茶灰色粘質土 | R1-1層 茶灰色粘質土 |
| M3層 濃砂茶灰色粘質土 | R1-2層 黒灰色粘質土 |
| M4層 淡茶灰色砂質土 | R1-3層 濃砂灰褐色粘質土 |
| 2号溝 | 2号流路 |
| M5層 暗灰色砂質土 | R2-1層 茶灰褐色粘質土 |
| | R2-2層 茶灰色粘質土 |
| | R2-3層 暗灰色砂質土 |

2. 遺構と遺物

1号溝 (第3・5・7・8図)

調査区を南北方向に流れるもので、幅は平均で2m、深さは約20cmである。2号流路と切り合い関係にあり、2号流路を切っている。

1号溝出土遺物 (第9図・1)

1は甕である。復元口径14.4cm、残存高6.7cmを測る。頸部はくの字状で、口縁部は反りぎみに外方に開き端部は小さくつまみ出す。また、体部は長胴形になるもので、外表面は叩きによる凹凸が残る。内面はヘラケズリ後ハケ調整が施されており、指頭圧痕が残る。胎土は角閃石・石英を含み、外面は暗茶褐色、内面は暗褐色を呈する。

2号溝 (第3・4図)

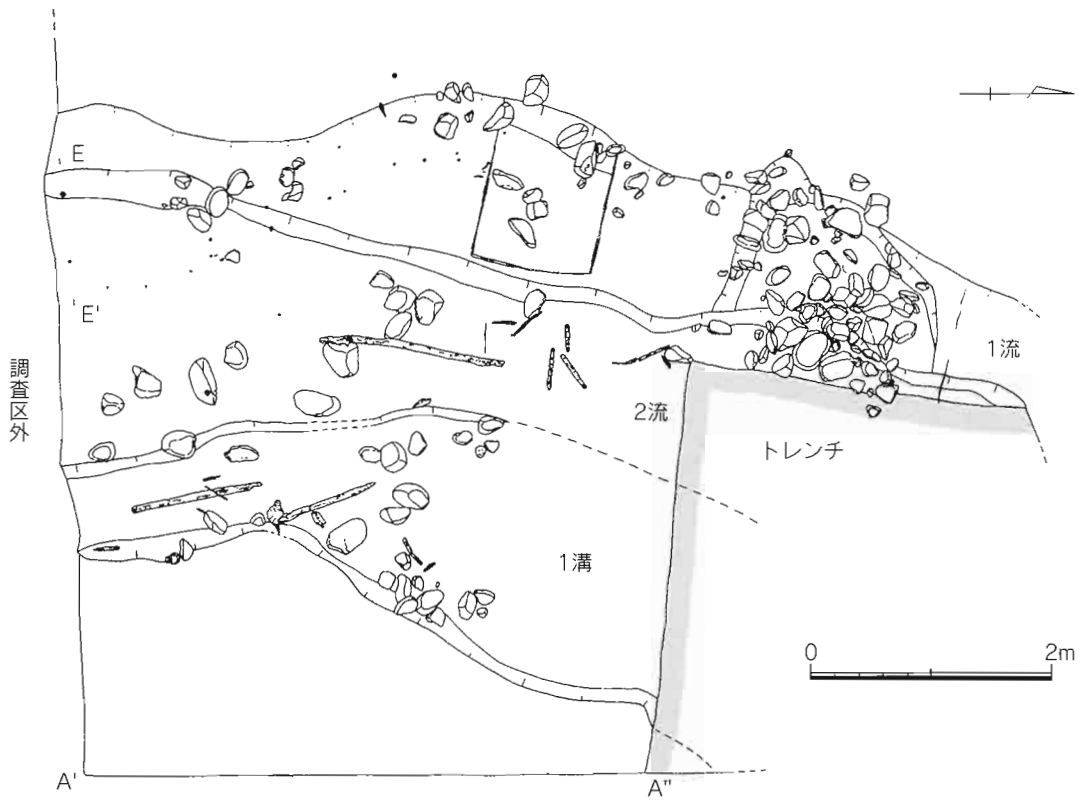
調査区北側の地形が傾斜している際に確認された。東西方向に検出され、東から西に緩やかに傾斜している。削平を受けていると思われる、幅は平均で50cm、深さは最深で10cmほどである。出土遺物はなかった。

1号流路 (第3・4・5図)

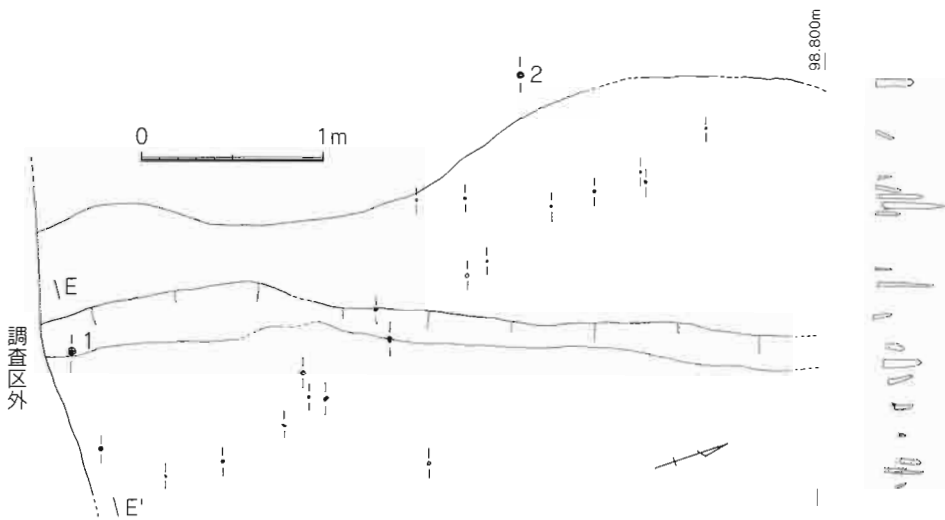
調査区北側の中央で南北方向に確認され、2号流路に切られている。東壁土層では幅3.5m、深さ30cmを測る。出土遺物はなかった。

2号流路 (第3・4・5・7・8図)

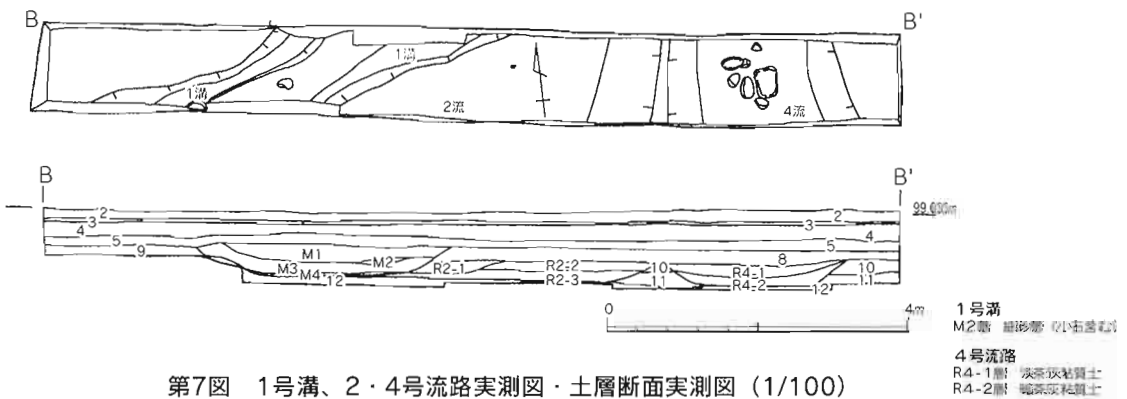
調査区全域で南北方向に確認され、南に行くにしたがって地形に沿う形で西流する。幅は北側で4m前後、南側では7mほどに広がっている。出土遺物は少量の土器や木製品があり、多くの流木が確認されている。



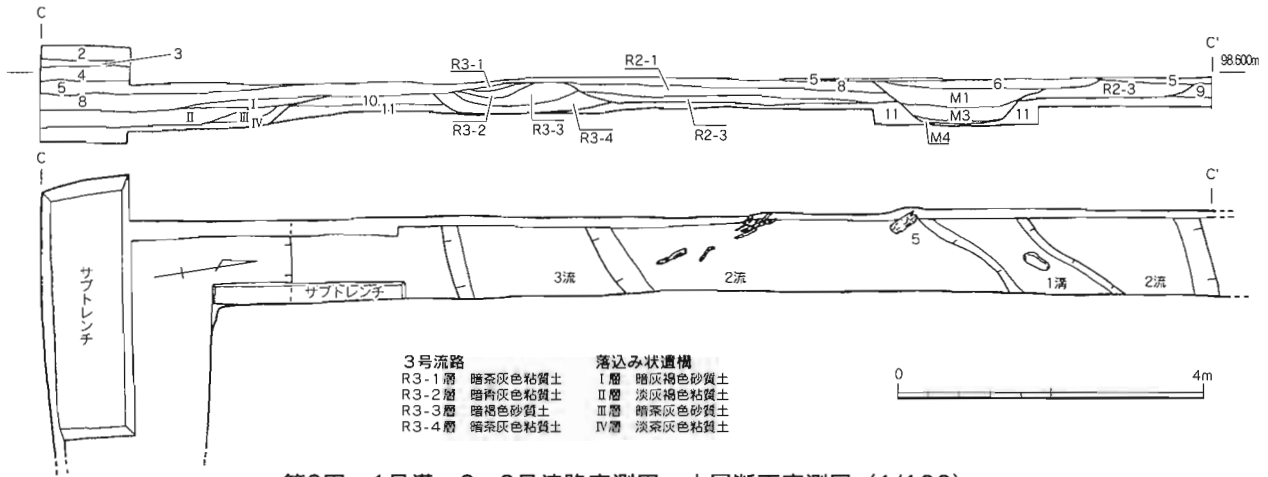
第5図 1号溝、1・2号流路実測図 (1/60)



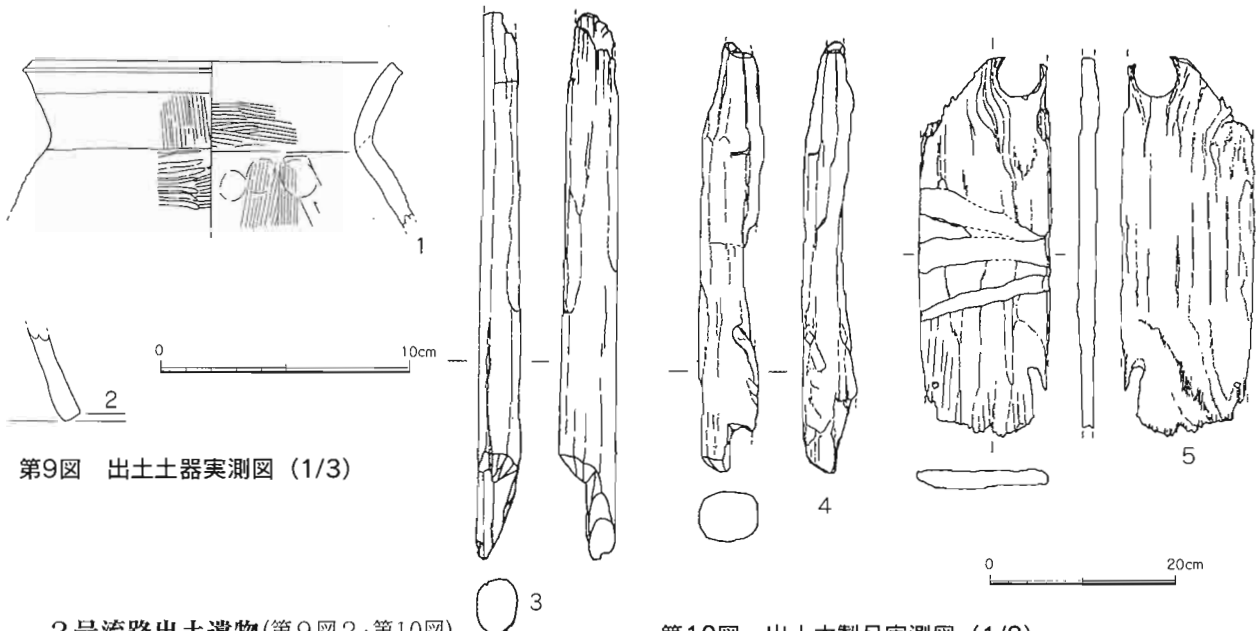
第6図 杭列実測図 (1/40)



第7図 1号溝、2・4号流路実測図・土層断面実測図 (1/100)



第8図 1号溝、2・3号流路実測図・土層断面実測図 (1/100)



第9図 出土土器実測図 (1/3)

第10図 出土木製品実測図 (1/8)

2号流路出土遺物(第9図2・第10図)

2は弥生土器の支脚端部である。

胎土は角閃石、石英を含み、外面は淡橙褐色、内面は暗褐色を呈する。3、4は杭状木製品で、先端部は加工されている。2点とも芯木材である。3は残存長59cm、幅6cmを測る。4は残存長46.5cm、幅は最大で6cmを測る。5は板状木製品で、片面に3条の帯状痕跡(凹部)が見られる。長軸方向は破損しているため、残存長は41cm、幅は平均で14cmを測る。

3号流路 (第3・8図)

3号は南北のトレンチ南側で確認され、他のトレンチでは確認されていないことから東西方向に伸びていたと考えられる。2号流路に切られているため検出面では南側の立ち上がりのみ確認されたが、西壁土層より確認した規模は幅2.2m、深さ40cmを測る。出土遺物はなかった。

4号流路 (第3・7図)

4号は中央の東西トレンチの東側で確認された。北側の調査区では検出されていないため、本来の流路方向は明らかにしがたいが、おそらく南北方向に伸びていたと考えられる。他の遺構とは切り合い関係がなく、出土遺物もないため時期は不明である。規模は幅3.0m、深さは30cmを測る。

杭列（第6図）

調査区北側で、およそ南北方向に21ヶ所が確認されている。南側は調査部分の端にかかっていることで確認できなかったが、さらに広がる可能性が考えられる。

杭は全て丸杭で、規模は上半部が削平されているため残存長によるものだが、長さ約5～20cm、幅3～5cm内に収まる。なかでも、No. 1・2の杭は比較的大きく、2本だけは他の杭と並びが異なっているため、この杭列を理解する上で重要と思われる。しかしながら、今回の調査では杭列の全容を知るまでには至らなかったためこの遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

落込み状遺構（第3・8図）

調査区南側で10層からの落込み状の堆積が確認された。トレンチ内で確認されたことから、具体的な規模はわからなかったが、確認された範囲は約10mに及び、深さは60cmを測る。深さについては、調査途中から水が湧き出してきたため確認が可能だった数値であり、地形が傾斜している南側ではさらに深くなっていくと考えられる。出土遺物はなかった。

IV まとめ

調査では、溝や流路及び杭列などが確認された。遺構の時期については、出土資料が少なく時期を特定することが難しいが、1号溝は出土した土器から古墳時代初頭の時期が与えられるほか、2号流路は1号溝に切られており、弥生時代後期頃の支脚片が出土していることから当該期の流路と考えられる。また、2号流路からは木製品が出土しているほか、流木が多く検出されている。

上記の1号溝については、明確な畦畔が確認されたわけではないが、土層などから1号溝の東側には水田面が広がっていたものと考えられる。

以上に関連して、G地点から西に300mほど離れた三和教田遺跡B地点では弥生時代後期の環濠や竪穴住居跡などが見つかっているほか、400mほど離れたC、E地点では、C地点より縄文時代後期～晩期の遺物を含む流路が検出されている^{註1)}ほか、E地点において自然地形の落ち際に弥生時代後期頃の^{註2)}小溝が見つかっている。今回検出された1号流路は、2号流路との切り合い関係により弥生時代後期以前の時期と考えられ、遺物が確認されていないため時期は特定できなかったが、C地点で確認された流路と方向性や自然地形に沿って流れていることなどを考えると同じ流路であった可能性もある。また、2号溝はE地点の小溝と同様な位置関係で確認されたが、2号溝は土師器の小破片を含む5層を掘り込んでいることから古墳時代以降の時期と考えられ、両者には時期差が生じるため、別の遺構と考えたい。

試掘調査では、中世期の遺物も出土しており、当地では古墳時代以降、現代に至るまで継続的に水田を営んでいた様子が想起できる。調査で確認された溝や流路などは、今後、三和教田遺跡の広がり考える上で重要な成果であり、これまでの成果と加えて、近年開発が多くなっている三和地区での文化財保護を図る上で貴重な資料となるであろう。

註1) 吉田博嗣『三和教田遺跡C地点』大分県教育委員会 1997年

註2) 若杉竜太『三和教田遺跡E地点』平成10年度日田市埋蔵文化財年報 1999年



1.調査区全景写真(北から)



4.1号溝・1号流路検出状況



5.1号溝・2号流路



6.杭列検出状況



2.1号溝、2・4号流路



3.1号溝、2・3号流路



7.出土土器



8.出土土器



9.出土木製品



10.出土木製品



11.出土木製品

報告書抄録

ふりがな	みわきょうだいせき (じいちてん)
書名	三和教田遺跡G地点
副書名	日田市埋蔵文化財調査報告書
巻次	第27集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	吉田 博嗣
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2000年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みわきょうだいせき 三和教田遺跡 ちてん G地点	おいたひな 大分県日田市大字 みわ おおつか 三和字大塚	44204-6				20000111 ~ 20000210	300㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三和教田遺跡 G地点	溝ほか	弥生時代 古墳時代	流路 溝	弥生土器 土師器	

三和教田遺跡G地点

日田市埋蔵文化財調査報告書第27集

平成12年9月30日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 尾花印刷有限会社
大分県日田市田島本町8-8

